蛇口の向こう側

沖縄県　小禄中学校　三年　赤嶺　友紀

蛇口をひねれば水が出る。それはずっと、疑うことのない当たり前だった。

朝起きて顔を洗い、のどが渇けばコップに水を注ぐ。そんな何気ない毎日の中で、水が止まるかもしれないと考えたことは一度もなかった。

その意識が変わったのは、テレビのニュースだった。ダムの水が減り、断水に追い込まれる地域の映像が流れていた。水が出ない蛇口を前に困っている人の姿が頭から離れなかった。

沖縄でも、ダムの貯水率が下がり節水が呼びかけられていたことがある。そのときも、「大変だな。」と思うだけで、自分の生活とは少し距離があるものとして受け止めていた。そして去年、導水管の破裂により「この地域は十八時から断水します。」とはっきりとした連絡があったとき、空気が一気に変わったように感じた。現実の話として目の前に突きつけられたようで、家族もすぐに動き出した。私もペットボトルや水筒を探し、水を入れる準備をした。お風呂の湯船にも水をためながら、「本当にこれだけで足りるのだろうか。」と何度も考えた。

断水の時間になり、断水しているか確認するために蛇口をひねった。すると水は、いつもと同じように何の問題もなく出てきた。「なんで?」と驚いていると、家族が「この家には貯水タンクがあるからだよ。」と教えてくれた。

その瞬間、少し恥ずかしさを感じると同時に、今まで自分がどれだけ水の仕組みを意識せずに過ごしていたかを思い知らされた。水はただ蛇口から出てくるものではなく、もしものことを想定し、貯水や配水といった仕組みの上に成り立ち、それを支える人たちの仕事によって守られているのだと初めて実感した。

さらに、水の安全性についても考えるようになった。目に見えない物質が水に含まれることが問題になるというニュースを見て、何気なく使っていた水が、実は多くの管理のもとで守られているものだと知った。

水は人間だけのものではない。川や海に生きる生物にとっては、そのまま生活の場であり、水の量や質の変化は生態系を左右する。水不足に悩む地域がある一方で、私たちは安定して水を使える環境にいる。その差の大きさに、初めてはっきりとした違和感を覚えた。世界では今も水不足に苦しみ、安全な水を手に入れることができない人々がいると知り、この問題は決して他人事ではないのだと感じた。

当たり前だと思っていたものほど、実は多くのものに支えられている。そのことに気づいた今、これまでのように何も考えずに水を使うことはできない。

これからは、水を大切に使うということだけではなく、その背後にある仕組みや人々の努力にも目を向けていきたい。例えば、使いすぎないように意識したり、こまめに水を止めたりするなど、日常の中でできることから実践していきたい。蛇口をひねれば水が出る。その一つの動作の裏にあるものを忘れずに、これからの生活の中で意識し続けていきたいと思う。